



埼玉県の先輩に

せんぱい

インタビュー!!!



車いすバスケットボール

東京2020パラリンピック競技大会・男子銀メダル

あかいし りゅうが

赤石 竜我さん

(さいたま市出身)



赤石竜我さんって、どんな人？

赤石さんは、さいたま市出身の車いすバスケットボールの選手だよ。



東京2020パラリンピックでは、チームの最年少メンバーとして銀メダルをとったんだ。

赤石さんは、5歳の時に発症した病気によって車いす生活を送ることになったんだけど、子供の時は、友だちといっしょに外でドッチボールやバスケットボールをやったり、友だちの自転車に車いすで付いて行ったりと、外で遊ぶのが大好きで活発な子供だったんだ。



車いすバスケットとの出会い

Q：赤石さんにとって車いすバスケットとの出会いはどのようなものですか？

A：子供の時は、車いすの自分にコンプレックスがありました。体を動かすことは大好きでしたが、50m走だとぶっちぎりでビリ…。いつも悔しい思いをしていました。

いつか歩けるようになって、スポーツをやりたいという思いがありました。それが、中学生の時に東京パラリンピックが決まってから、「東京パラリンピックに出る」という夢ができました。車いすバスケットと出会って、夢や目標ができましたし、何より生きがいがありました。



ちょこっとメモ

インタビューをした時、赤石さんは大学3年生。車いすバスケットと大学生活との両立は本当に大変だそう。そんな赤石さんの趣味はマンガを読むこと。休日は1日ゆっくりマンガを読んで気分転換をしているそうだよ。



苦しくても…

Q：車いすバスケットをやっていて苦しいときや
つらいときはありましたか？

A：車いすバスケットを本気でやめようと思ったことが一回ありました。高校1年生の時、同年代の選手が大会に出て活躍かつやくしている中、自分が置いていかれているのがすごくつらかったです。

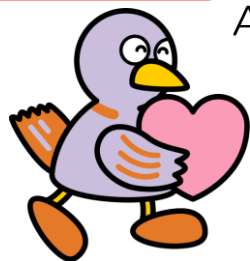
でも、なぜその時やめなかったのかというと、自分の中でゴールを決めたからです。日本代表なんて夢のまた夢のような実力だったので、まずは1年後の大会を目標にしてあと1年だけ頑張がんばろう、と決めました。

大きな目標も大切ですが、小さな目標を小刻みに立てていくことで、ここまで続けることができました。



母の存在

Q：赤石さんをここまで支えてくれた方は？



A：多くの人の支えがありましたが、その中でも一番僕ぼくを支えてくれたのは母です。人生の中で一番つらかった時を知っているのが母です。母の存在があったからこそ、今日まで続けることができたと思っています。

銀メダルをとったときは、恥はずかしくて自分の口では伝えず手紙で気持ちを伝えました。母の誕生日に、手紙と銀メダルをずっと渡わたして…。母も喜んでくれました。

埼玉の
子供たちへ

Q：未来を生きる埼玉の子供たちへ
メッセージをお願いします。

A：夢を実現させるためには、恥はずかしながら口にしてください。僕は中学生の時から車いすバスケットを始めましたが、始めたての初心者はつしょの時から「僕は東京2020パラリンピックに出る！」ということを出し続けてきました。

人に無理だと言われたり、スランプもありましたが、それでも僕は口に出し続けてきました。東京パラリンピックでも、「メダルをとる」と言い続け、結果を出すことができました。自分を変えられるのは自分。待っているだけではだめです。皆さんも、本気で実現させたいと思うことは、ぜひ口に出して言うみてください。



ちょこっとメモ

車いすバスケット日本代表の合言葉は「一心（いっしん）」。
それぞれ立場や状況は違っても、メダルをとりたいという思いでチームの心が一つになったから、今回の銀メダルという結果につながったそうだよ。

